

# Stage Up

2003年

3

月号

生涯学習情報誌  
ステージ・アップ  
通巻 No. 118

もくじ

8 7 6 4 2

特集 インタビュー 馬場あき子さん  
生涯学習ア・ラ・カルト  
ぐるーぷBOX / いま地域で 学校で  
まち・ひと・多面体 / くらし百景 歌壇  
イベントパーク



「淡雪」(ミノムシ) 撮影: 川口 道明

発行・(財)川崎市生涯学習振興事業団  
〈ホームページ〉 <http://www.kpal.or.jp>

〒211-0064 川崎市中原区今井南町514-1  
TEL 044 (733) 5560(代) / FAX 044 (739) 0085  
ステージ・アップ直通 TEL 044 (733) 5811 E-メール: [stage-up@kpal.or.jp](mailto:stage-up@kpal.or.jp)

## 特集

## インタビュー

## 歌人 馬場 あき子 さん

千数百年の歴史を持つ文芸「短歌」。31文字の世界にほとぼしる思いを注ぐ。短歌人口は50・60代を中心に100万人とか。かわさき市民アカデミーでは昨秋、現代歌人の第一人者、馬場あき子さんを講師に迎え、夜間講座「短歌を楽しむ」を開催しました。「西行のさくらありわがさくらありて小さけれどもわがさくら咲く」。馬場さんの声が朗朗と響く教室には、熱心にペンを走らせる受講生が多く見うけられました。

馬場さんは、全国各地で開かれる歌会や講座で歌を指導する傍ら、新聞各紙の歌壇選者としても活躍。2002年11月には、歌集『世紀』（梧葉出版）の刊行とこれまでの業績が評価され「現代短歌大賞」を受賞しています。「歌は私にとってごはんのようなもの」と語る馬場さんに、短歌との出会い、歌づくり上達のコツを伺いました。



## 三十一文字に心もよう織りこむ 美しい日本語を守るのが歌人

——馬場さんは歌人としてご活躍ですが、短歌を作るようになったきっかけはどんなことですか。

馬場 5・6歳の頃から、百人一首がとても得意でした。母親が早く亡くなったので祖母と伯母に育てられました。正月は女の人がたくさん集って百人一首をしていて、伯母が韻律高く札を読んでいましたね。その韻律が私の体の中に入っています。それが私の短歌体験ですね。その後小学校を卒業する時に、一行で後輩に残すことばを作るように言われ「それなら短歌がいい」と思って作りました。それが歌を作った初めです。歌と言えるようなものではありませんでしたけれど。

私が本格的に歌を始めたのは戦争中です。学徒動員で工場の寮に入って働かされていたので、本も読めない状態でしたが歌を作っていました。17歳で敗戦になり、戦中と戦後では何もかもひっくり返って、大人たちの言うことがガラリと変わりました。子ども心に「戦前・戦中・戦後を通して、もし一筋続いている糸があったら何だろう」と考え思いあつたのが歌でした。とりあえず歌を詠むしかない。家が焼けて、何もなくなったとき、友達が「長塚節歌集」を貸してくれました。最初はあまり面白くない本だなと思いましたが「馬追虫のひげのそよるに秋はまなこを閉ちて思ひみるべし」の歌を読んだ時、涙がこぼれました。街は瓦礫の山で防空壕の中で生活している人さえある、それでも秋になるとコオロギが鳴くのです。その歌に大変感動を覚えました。それで長

塚さんのまねをして50首ぐらい歌を作りました。これが第一の開眼です。

——歌を作る中で、馬場さんが影響を受けた方は？

馬場 第1歌集を出すまではだれの影響も受けなくて自分ひとりでやっているつもりでした。昭和30年代になってから、さまざまな方から影響を受けましたね。特に窪田空穂、窪田章一郎、土岐善磨から。短歌について話すことが、50歳すぎたら空穂の言っていたことと同じだと気づきました。不思議だなと思いますね。窪田章一郎さんの、温かな受容的なやさしさにも影響されましたね。影響というのは自分で意識しないでも何らかの形であらわれてくるのでしょうか。そういった点で、私はたくさんいい仲間に出会ったと思います。

——馬場さんにとって短歌とは…

馬場 短歌は私にとってごはんみたいなもの、傍らにあるものです。歌わなければいけないものです。今は忙しくて毎日何首も作ることはできません。歌を作るのは、電車の中とか、道を歩きながら、そして夜寝てからです。枕元に白い紙と鉛筆を置いて、電気を消して真っ暗な中で紙に書いています。何故かというと、体が楽になっている、リラックスした状態なのでいろんなことを思いつくわけです。昼間は忙しくてダメです。真っ暗な中で15首ぐらい作ることもあります。12時くらいから夜中の3時半ぐらいまでかかりますね。興奮

してくるから眠れない。そうなるといくつも歌が出てきます。歌の神様がついている感じです。朝になってみると、紙が(歌を書いた物)たくさんになっています。

——初心者に歌づくり上達のアドバイスをお願いします。

馬場 1日1首作るといいですね。その日休んだら翌日2首作ればいい。ひと月に20首から30首作ればいいですね。

歌を作った場合には客観的な視線が大事です。ですから友達やグループで批評し合うことが必須の条件です。その次に、ドングリの背比べではなく、ちょっと先に進んでいる人に見せて、批評をしてもらうこと。歌を作ることに慣れてきたら、20~30人ぐらいの歌会に出てみるのもいいでしょう。そうして1年続けると自信がついてきます。自分の歌は「下手だ」と思っている、かわいいものです。だから自分の歌を人にけなされると気分がよくない。でもそこを我慢して他人の批評を受け入れることによって上達すると思います。南北朝期の歌人でもあった兼好法師は「芸事をする時は上手になってから人前に出ようとするのではなく、初心のうちから泥まみれになって人の言うことを聞き反発し、また人の言うことを聞き、という過程を経なければ上達しない」と言っています。そして大事なものは、「ものをよく見る」ということです。



ユーモアあふれる話に、受講生の笑みがこぼれる

——「ものをよく見る」とはどういうことですか。

馬場 ていねいにみる、歌の言葉になるものを探すということです。歌う時は、具体的な歌い方を心がけたほうがいいですね。人を納得させるためには、具体的なものが不可欠です。「よく見る」ということの中には、人の動きをとらえる、イメージをつかむ、ということも含まれます。日常的には、発見するということが、何でもなしのものにも「面白い」と思えるものを見つけることです。

歌を始めて1年ぐらいしたら、腕試しの場面がほしいですね。雑誌や新聞に投稿の場があるのでそこへ作品を出すのもいいです。2年目になったら比喩や韻律の工夫、どう表現したら魅力的か、それらを自分に加えていくことです。これらをこなして行って3年目になったら一人前の歌人です。私は3年たったら歌集を出してもいいと思っています。

——年齢を重ねると感受性が鈍るような気がします…

馬場 若い人は、連想の素晴らしさや感覚の鋭さがあるし、もののイメージもすぐにつかめます。若い世代から学ぶことは多いですね。私たちも常に新しいものを吸収しなくてはと思います。でも、年輩者は若い人にはないタテの軸、時間の

馬場さん  
アカデミーの講座で作品解説をする



蓄積をたくさん持っています。だから、中高年の方は「述志」を歌えばいい。年を重ねると感慨、過去、深さなどいっぱい持っています。どれだけ深くみることができかが大事です。年齢に応じた歌を作ればいいと思います。

歌にすることによって初めて他者を発見します。他者としての鳥、他者としての人、自分と同時代に生きている他者を発見します。だから短歌は非常に人間的な文芸です。短歌は人を慰める作用もあります。つまり慰藉・癒しになるのです。

——馬場さんのこれからについて聞かせてください。

馬場 短歌は千数百年生きながらえてきたものです。世界に冠たる文芸様式で、外国からも注目されています。今、短歌人口が増えている、月々発表される歌がたくさんあります。その中で、どうやって名歌を残していくかが最大の問題です。例えば近代短歌といえば、若山牧水や北原白秋、斎藤茂吉の歌などが残っています。そういう近代歌人は30人もいないでしょう。でも今はどれだけ歌人がいるか。そのどれを残していくのがいいか、そういうことを一生懸命しなければと思っています。私たちが「この歌はいい歌ですよ」と折り紙をつけて、名歌を次の世に残す仕事も大事だと思っています。

戦後、団地がたくさんできて、2DKの住まいが百人一首、仏壇、神棚を減ぼしてしまっただけと言われていました。減ぼしたものをどう回復するか、例えば百人一首。これが大事だと思うのは、ヨーロッパにはギリシャ神話や聖書など、啓示に富んだ共通教養書があります。それを読まなければ会話ができないというようなものです。日本において近代まではそれが一般にとっては百人一首で、短歌の教養につながっていたわけですね。それがいなくなると、日本語が乱れたと思います。そういう共通の教養、百人一首を復活していかなければ、日本人って一体何だったのかわからなくなってしまうでしょう。日本の言葉の美しさを守って行くのは歌人だと思っています。だから、歌を作っているというだけで「日本語を守る人々」と意識して威張っていいと考えています。

### 馬場 あき子さん (ばば・あきこ)

1928年、東京生まれ。歌人。現代歌人協会常任理事。朝日歌壇選者。本名・岩田暁子。昭和女子大学国文科卒業。48年から77年まで教職に従事。78年、『かりん』を創刊・主宰。同年、現代短歌女流賞。85年、川崎市文化賞受賞。86年から12年間川崎市教育委員会委員。94年読売文学賞、紫綬褒章授与。2002年現代短歌大賞受賞。歌集は『早笛』『桜花伝承』『雪鬼華麗』『晩花』など多数。古典文学や能楽に関する著作も多数。麻生区在住。

## ●まなぶ●

## 2003年第1期 プラザ陶芸教室 受講者募集!

無心に土と向き合い、自分を見つめる時間。陶芸教室に参加して韓国人の先生と作陶を楽しみませんか!

## ◆手びねり土曜コース

5月10日～7月26日の毎週土曜日 9時半～12時  
全10回 (7月5日と19日を除く)

## ◆ロクロ土曜コース

5月10日～7月26日の毎週土曜日 13時半～16時  
全10回 (7月5日と19日を除く)

【対象】18歳以上、ロクロコースは手びねり経験者

【定員】手びねり15人、ロクロ10人(各抽選)

【内容】成形から釉薬までの基礎について学習

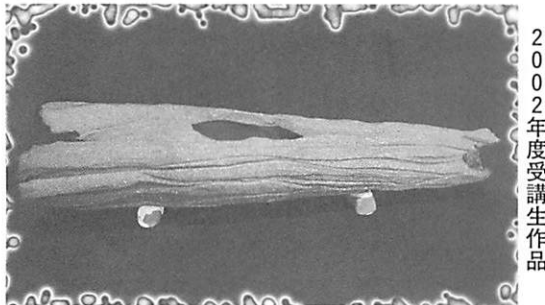
【費用】手びねり…22,000円(材料費・焼成料込み)  
ロクロ…28,000円(材料費・焼成料込み)

【申し込み】官製はがきに「プラザ・○○○土曜コース」と明記し、郵便番号・住所・氏名・電話番号を記入の上、下記あてにお送りください。

〒211-0064 川崎市中原区今井南町514-1  
川崎市生涯学習振興事業団  
学習事業室「陶芸教室」係

【締め切り】両コースとも4月4日(金)

問い合わせ 学習事業室 ☎044(733)6626



かわさき市民アカデミー開講式記念講演会  
「経済と倫理～脱成長社会のヴィジョンのために」

かわさき市民アカデミーでは第12回開講式の後に行われる記念講演を公開します。アカデミー会員・聴講生に限らず、関心のある方はどなたでも無料で聴講できます。ご希望の方は学習事業室までお申し込みください。Faxの場合は、氏名・住所・電話番号を明記してください。

◆日時 4月5日(土)11時から12時20分

◆会場 川崎市生涯学習プラザ401会議室

◆講師 山脇直司・東京大学大学院総合文化研究科教授

◆定員 先着70人

申し込み 学習事業室 ☎044(733)6626/Fax044(733)6697

## ●さがす●

## 「指導者・人材情報」

## 登録内容変更手続きのお願い

市内の公共施設に設置されている「ふれあいネット」には学習や生活に役立つ情報が入っています。その中の「指導者・人材情報」は芸術・スポーツ・レクリエーション・家庭生活・ボランティアなどに大別され、計760件の情報があります。これはグループで学習やスポーツをする時に、講師や指導者を探すのに活用されています。

しかし、情報のほとんどは、平成11年の登録時から更新されていません。連絡先や指導内容などが変わった場合は、変更手続きをしてください。手続きは所定の用紙に記入するだけです。電話でも受け付けます。学習情報室までご連絡ください。

市民の皆様の多様なニーズに応え、学習に役立つ「ふれあいネット」にしていくため、情報の拡充が求められています。指導者の新規登録も随時受け付けていますので、あわせてお願いします。

問い合わせ 学習情報室 ☎044(233)6250

## 川崎市子どもの権利に関する条例—その20

## 自分達の手で音楽フェスティバル

子どもの発表の場や居場所づくりを目的に青少年音楽フェスティバルを実施しているグループがあります。それが麻生区の青少年児童健全育成コンサート&居場所作り実行委員会。運営委員会委員長の三宅さんにフェスティバルの紹介をしてもらいました。

運営委員長 三宅勇輝(17歳)

去年から始まったこの音楽フェスティバルは普段学校等で活躍しているグループが集まって一つの音楽祭を作るという有意義なものになりました。仲間達が集まって組んだグループの発表の場というのは少ないので、特に学校の外での発表の場は貴重なものです。

去年は11グループが出演し、それぞれ思いっきりバンド演奏やダンスが踊れたと思います。全グループの発表終了後、皆で一つのことのできたことに僕自身は満足しました。達成感から皆の表情も明るくなっていました。思い通りにいった人、心残りがある人、それぞれ皆いろんな思いをしました。だからこそ今年は去年よりもいいフェスティバルになると思います。

今年も着々と準備が進んできています。それぞれのグループの練習にも熱が入ってきたと思います。僕達が作る音楽フェスティバルをどうぞ見に来てください。

日時:2003年3月27日(木)13時半開演

場所:新百合21ビル内トウェンティワンホール

問い合わせ:実行委員長 鈴木正視 ☎044(987)9817

※このコーナーでは(財)川崎市生涯学習振興事業団の事業や関連施設の紹介をしています。

## ラ・カルト

## ●たのしむ●

## 等々力競技場で熱い声援おくらう

## 「川崎フロンターレ市民後援会」会員募集

川崎フロンターレ市民後援会では、川崎市をホームタウンとする「川崎フロンターレ」を支援し、フロンターレと市民との連携を深めていく活動を続けてきました。2003年より会員組織の充実を図るため、フロンターレのファンクラブと統合しました。J1昇格をめざし熱い闘いを繰り広げるフロンターレの選手に、より多くのサポーターが団結して声援を送り、夢が実現する喜びを共に分かち合いましょう。このような活動を通じて市民の連帯の輪が広がり、ひいては地域の振興と活性化につながるものと考えています。



写真提供 川崎フロンターレ  
撮影・大塚優

市民後援会ではただいま会員を募集しています。会員になるとホームゲームのチケットプレゼントをはじめ、たくさんの特典があります。家族・友人お誘いあわせの上、ご入会くださいますようお願いいたします。

みんなで等々力に大きなウェーブを起しましょう。

## ◆会員メニューと年会費◆

- ・個人会員…2,000円
- ・ファミリー会員…4,000円
- ・ジュニア会員…200円
- ・法人・団体会員…10,000円(1口)

## ◆会員特典◆

- ①ホームゲームのチケットプレゼント
- ②ホームゲームチケットの会員割引
- ③会員証の発行
- ④会報誌の発行
- ⑤入会記念グッズの進呈
- ⑥グッズの会員割引
- ⑦各種イベントへの招待

※ホームページ：<http://www.netlaputa.ne.jp/~k-cityfb>

問い合わせ 川崎フロンターレ市民後援会 ☎044(434)5346

## ハート &amp; ハーモニー Vol.30

## コールドチェーンをつなぐことは

情報化社会のキーワードは「つなぐ」です。

アイスクリームの消費量が最も多くなるのは日本では冬場です。暖かい室内で冷たいアイスクリームを食べることに違和感はありませんが、これは冷凍庫の普及なしには考えられないことです。1980年代までハワイ土産には高級アイスクリームがありました。「コールドチェーンの確立していない国には進出しない」このメーカーが日本に来たのは90年代です。「冷たいものを冷たいまま消費者に」届ける発想は、アメリカでは20世紀前半の設定である映画「エデンの東」の場面でも見られます。冷蔵輸送の確立と冷蔵庫の普及がアメリカ人の食生活をベーコンからステーキに変え、胃ガンを減らし、心臓病と大腸ガンを増やしたことは、有名な話です。

コールドチェーンは温度管理さえ適切に行われれば良いのですから、簡単な事のように思えますが、日本での普及は遅かったと言えます。消費者が食品の適切な流通に受身であったことも、原因の一つではないでしょうか。球技のパス回しで考えると、日本ではチームで猛練習したパターンは得意でも、個人の技を活かしつつ確実性の高いシステムを作ることは不得手に感じられます。「誰かがどうにかしてくる」結果待ちではチェーンはどこかで途切れます。目的意識をもった役割分担が必要なのです。

生活を下支えする社会基盤では、見えやすいつながりである水道や電気に比べると、見えにくい下水道などは、積極的につながった構造にしようという社会の意思が稀薄な感がします。チームスポーツでは自分の守備範囲が決まっていますが、隣の守備範囲と意識的に重ねておかないと、チームとして守っていることになりません。様々なプロジェクトでも、自分の範囲をはみ出した部分まで関心を広げていないと、チームが繋がらないのではないのでしょうか。積み木とレゴ<sup>®</sup>の構造の違いを見れば明らかです。アポロ11号で人類が月に着陸し、13号が重大事故から帰還できたのも当時の技術水準より、チームワークのレベルの高さにまず感心すべきです。

21世紀に入った日本では、まだネットワークとして繋がっていないものが幾つかあります。人が歩く道、バリアフリー空間、きれいな空気、これらが繋がっていないと、そこに健康に対する大きなリスクがあり、生活環境に大きな負荷を与え続けます。

快適性を犠牲にしても気が付かない、無神経な社会はそろそろ卒業すべきです。

(健康教育担当 スポーツドクター 野田晴彦)

## ぐるーぷBOX

## 感動する心を子どもと大人で共有

## 「B・Bハーツ」

小田急線読売ランド前駅から徒歩数分。「B・Bハーツ」(菊地栄子代表・メンバー6人)の活動拠点の丸太小屋があります。このグループは、平成12年4月「創作を通して子ども達に感動する心を育てたい」とお母さん7人で発足。現在、「影絵」「絵ロウソク」などの作品を子どもとともに作っています。要請があれば出向いて工作教室などの指導も行います。会の名称は「一番のAでなく二番目のBでいい。7人が心(hearts)を触れ合わせて始めよう(begin)という願いが込めてあります」と菊地さんは話していました。

この会が開発したオリジナル工作「絵ロウソク」=写真右下=は、青少年創作センターなどの教室に参加した子ども達に大人気。ロウで作ったカラーシートをカッターで切り抜いたり、指で練って形を作ったりして、ロウソクに絵付けをします。それを溶かしたロウに入れ絵がはがれないよう付着させればできあがり。ロウソクの灯に映し出された絵が幻想的な雰囲気を醸し出します。

菊地さんは昭和50年に、地域の子供達に自宅の一室を開放して「小さな小さな児童館づくり」を提唱する芸

術教育研究所主催の影絵づくりに参加したのがきっかけで、翌年「小さな小さなかげ絵児童館」をオープン。当初6畳程の台所で活動していましたが、5年後の国際障害者年に川崎市と神奈川県からの奨励金で、大工の指導で子ども達と一緒に庭に丸太小屋を建てました。以来今日までここは活動拠点として賑わっています。「この小屋には、子ども達の感動とドラマが詰まっております、子どもから豊かな心をいっぱい貰っています」と菊地さんは話しています。児童館をボランティアで支えるお母さん達の延長線に「B・Bハーツ」の活動があります。問い合わせは☎044(966)2316の菊地さんへ。



## いま地域で学校で

## 「お米パーティー」で収穫の喜びを味わう

## —夢見ヶ崎小学校—

幸区の夢見ヶ崎小学校(海老澤亨校長、児童数417人)では、数年前から5年生が総合的な学習の時間で同校の敷地内の夢見田圃(広さ4畝弱、3つあった池の1つを田にしたもの)でイネの栽培に取り組んでいます。

同校近くに住む和田二三さん、北谷しげさんのお孫さんの在学時から、子どもたちは田起こしや田植え、稲刈



り、脱穀など収穫までをこのお二人の方の指導と協力に支えられながらイネの世話をしています。昨年秋には、1升1合の夢見米を収穫。米の使い道について話し合い、「おにぎりにして、他種の赤米・黒米・玄米と質や味などを比べてみよう」「収穫までお世話になったお二人を招待して『お米パーティー』を開こう」ということになりました。

年末のある金曜日の午後、同校に伺いました。エプロンと三角巾を着けた子どもたちは、炊きあがった4種のご飯を手にも水をつけながらおにぎりづくり。グループ毎の4つの皿に15~16個のピンポン球大のかわいいおにぎりが次々と盛られていきます。その後、教室前の広場で「お米パーティー」の開始。収穫までお世話になったことの感謝とお礼を和田さんたちへ。「代掻きと脱穀が印象的だった。ご飯粒など残さず食べます」と感想や決意を発表。お米歴史クイズを解き終えて待望の4種のおにぎりの試食。「夢見米が1番だね」「玄米もうまいよ」「もうお腹いっぱい」など級友と話し、楽しい会となりました。「こうした活動で、子どもたちとかがわることができて、喜びいっぱいです」と和田さんは言っています。

海老澤校長は「人や自然、ものとのかわりの中で、心身ともに豊かな成長を期待したい」と語っていました。

まち・ひと・多面体

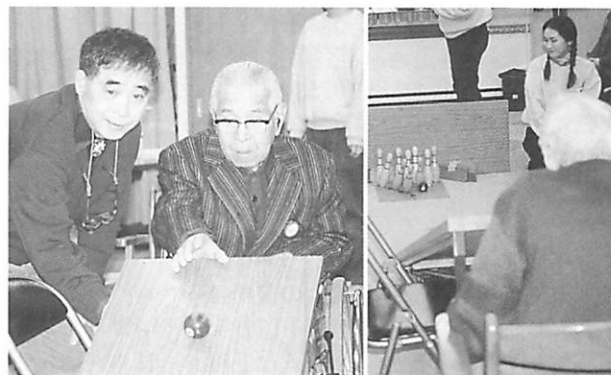
誰もが楽しめるスポーツを

「共遊球技」を開発・普及する竹内啓也さん

傾きをつけた机の上から球を転がしピンを倒す「スベリダイコロリング」。ビリヤードのように球をついて目標の球にあてる「リハビリヤード」。このユニークな呼び名は、竹内啓也さんが生み出した「共遊球技」の種目です。障害や年齢を越えて一緒に楽しめるスポーツとして、竹内さんは福祉施設や養護学校、各種イベントなどで「共遊球技」を紹介し普及に努めています。

この「共遊球技」誕生のきっかけは15年前、竹内さんが高齢者福祉施設の指導員をしていた時のこと。視覚障害のある人を担当し「目が不自由でも人とふれあいながら楽しめるものがあれば」と試行を重ね、鈴入りのバレーボールを棒で転がしピンを倒す「スティックボウリング」を開発したのが始まりです。今までに考案した球技は17種目。どの種目も「能力と障害を越えてみんながプレーできる。技術を問わない。勝てるチャンスがある」を基本にすえて作られています。

ある昼下がり、中原区にある「アースの森 小杉デイサービスセンター」でボランティアをしている竹内さん



を訪ねました。18人のお年寄りが紅白に分かれて「ウォールランボウリング」に興じています。「このゲームは、やる気1割、技術1割、後は運で勝負が決まります」と竹内さんが声をかけながら進行していきます。全部ピンを倒してポーズする人やねらいがはずれて残念がる人に拍手を送り、楽しそうに談笑する光景が見うけられました。

竹内さんは「声がかかればどこへでも行きます。プレーしている人の笑顔を見るのが喜びです」と語っていました。「共遊球技」に関する問い合わせは☎044(733)0732の竹内さんへ。『共に遊べる球技を創る』(日本レクリエーション協会)などの著書もあります。

くらし百景

歌壇

南口の会

朽落葉にほひけぶるを哀しゑと焚き残  
したるわが色探す

井上 音子

傘ふたつ打つ雨音の止みたれば子がたた  
みたる薄桃の傘

白井 正子

触るる男に柳眉さかだて知らぬ背の糸  
の気になる女こころの

梅本紀美子

破られし蜘蛛の巣危うく漂えり風吹  
くままに無にかえるまで

尾形 智子

年忘れの山行雨で中止され新年迎える  
何やらホツと

小宮 英子

古希越えて初患いの弟に末期の癌とは  
告げられぬ今

知工 悦子

学びては簀の子に躍る鮎のごとく抄い  
とりたる記憶のありや

津田 條栄

小型機の揺れもいとわずアリゾナの溪  
にあそびし我若かりき

水町 敏子

※南口の会は、岩田正先生を囲んで秀歌の鑑賞と作歌を勉強しています。折々の心を詠んだ互いの作品は、年齢を越えて親しみを増し楽しい集いとなっています。毎月第一四日曜の午後一時半から大山街道ふるさと館で行っております。問い合わせは☎〇四四(八四四)七〇八〇 白井まで。

情報コーナー **イベントパーク** 講座・コンサート他

## ●養老孟司講演会～「こころは脳か？」

3月4日(火)18時半開演。会場は中原市民館。入場料1000円。先着400人。☎(434)0253の川崎いのちの電話事務局。

## ●高齢者生きがいつくり講演会

3月4日(火)13時半から。場所はエポックなかはら。「まずは元気で“地域”参加」と題し、高橋紘士・立教大学教授が講演。パネルディスカッションあり。当日先着180人。☎(738)1560の生涯現役支援センター。

## ●地球市民講座～国際平和協力の最前線

3月9日(日)14時から、川崎市国際交流センター。「非暴力平和隊」を知る」と題し、非暴力平和隊・日本共同代表の君島東彦さんが講演。無料。先着100人。☎(435)7000の川崎市国際交流協会。

## ●簿記1級能力検定準備講座

4月7日～7月3日の月・木(日曜2回含む)の18時15分から、全27回。場所は労働会館。先着35人。受講料26400円、教材費8000円。☎3月16日(日)9時から☎(222)4416。

## ●川崎市民プラザ「春の短期水泳教室」

3月26日(水)～30日(日)8時から、全5回。5歳～中学生先着100人。受講料5000円。☎プラザフロントに。☎(888)3131。

## ●玉川大学公開講座

3月開講の▽暮らしに活かすマイナスイオン▽小児救急法▽博物館学など10講座の受講生を募集。詳細は☎042(739)8895の同大継続学習センター。

## ●ミニ画廊スナック琴①写真展②木版画展

①は3月1日(土)～15日(土)。原田茂雄・渡辺洋二の花と風景作品②は3月15日(土)～29日(土)。岡部信之グループの作品。展示無料。☎(544)0507。

## ●市民ミュージアム企画展～ポスターのユートピア

4月6日(日)まで。サンクトペテルブルグのロシア国立図書館が秘蔵する構成主義時代のグラフィックデザインの作品を公開。一般900円、高・大学生500円、中学生以下と65歳以上は無料。月曜休館。☎(754)4500。

## ●最後の浮世絵師 月岡芳年「月百姿」展

3月5日(水)～22日(土)。砂子の里資料館。無料。10時開館。日・祝休館。☎(222)0310。

## ●岡本太郎美術館「知覚スル装置―栗野ユミト・藤阪新吾展」

4月13日(日)まで。岡本太郎記念現代芸術大賞展で準大賞を受賞した二人の作品を展示。一般800円、高・大学生600円、中学生以下と65歳以上は無料。月曜休館。☎(900)9898。

## ●耳の日の集い～難聴者に元気を贈る

3月2日(日)13時半、国際交流センター。三遊亭京楽の字幕落語や難聴者に話を通じる方法、手話、読話、補聴器相談など。参加費1000円。☎FAX(753)0596、☎(811)8657の川

崎市中途失聴・難聴者協会事務局貝宅。

## ●プラザ橋「幼児と一緒に仲間を見つけよう」

①フリースペース子育て広場②1歳児の親子遊び

①は毎月第2木曜10時半～12時。直接お出かけを。②は毎月第4木曜10時～11時半。登録制50組。保健所・保育園共催。①②とも詳細は☎(788)1531のプラザ橋。

## ●川崎市民プラザ「趣味の教室」発表会

3月8日(土)・9日(日)の10時～16時。絵画、工芸、書道、アートフラワーなどの作品を展示。9日午後からコーラス、ジャズダンス、太極拳などの実技発表。☎(888)3131。

## ●ランチタイムコンサート～合唱によるおとなのための童謡

3月19日(水)12時15分開演、市役所第3庁舎ロビー。出演はコーロ・モナミ(合唱団)。曲目は「しゃぼん玉」「ゴンドラの唄」他。無料。☎(222)8821の文化財団。

## ●マリンバコンサート

3月6日(木)13時半、麻生老人福祉センター。マリンバアンサンブル琴音の演奏。「カルメンメドレー」「川の流れるように」他。無料。先着100人。☎(966)1549の同センター。

## ●朗読コンサート

3月16日(日)13時開演、かながわ県民センター11階。フリーライター鈴木政子さんが幼年時代を描いた「あの日夕焼け」を朗読。無料。当日直接。主催は「今の会自分史講座」。☎(090)1254)9582の宮嶋さん。

## ●「かわさきヤングミュージカル」出演者募集

9月20日(土)・21日(日)に市内で公演予定のミュージカルの出演者を募集。練習日程は5月10日～9月中旬の毎土・日10時～16時と8月下旬からは連日。練習場所は川崎市男女共同参画センター(すくらむ21)他。対象・定員は小学4年以上～25歳未満の70人で、公演と練習に参加できる人。4月19日(土)10時からすくらむ21で説明会あり。☎4月14日(月)までに、応募用紙(区役所・市民館他にあり)に記入して213-0001高津区溝口2-20-1同センターに郵送。☎(813)0808。

## 表紙写真 撮影者からひとこと

川崎近郊では見られなくなったミノムシ一つ  
物資が無かった子供の頃  
中の虫を追い出し財布を作った遠い思い出が痛む  
そして今は無き父母、兄弟、遠く離れた幼な友だち  
神社のはぜの木までも…  
故郷の追憶が通り過ぎていく  
淡雪が止むとすぐにとけはじめた

日本写真作家協会会員 川口 道明

## 「遊びの広場」事業終了のお知らせ

子どもたちが遊びを通して豊かな生活を獲得することをめざし、学校施設を遊び場として開放する「遊びの広場」事業が平成7年度より行われてきましたが、今年度いっぱい終了することになりました。

来年度より、市内の全小学校で「わくわくプラザ」事業が実施されます。この事業は、趣旨や開設日・時間など「遊びの広場」事業のそれを包含するものです。そこで、「遊びの広場」事業はその役割を終え、来年度より「わくわくプラザ」事業にその意義を引き継ぐものいたします。今後とも「こども文化センター」における諸事業とも合わせて、子どもたちの健全育成事業を推進してまいりたいと考えています。

川崎市教育委員会 生涯学習推進課